

# 加賀藩前田家「菅公八百年忌奉納連歌」について

綿 拔 豊 昭

\*キーワード

加賀藩前田家・北野天満宮・小松天満宮・能順・奉納連歌

はじめに

加賀藩と北野天満宮の関係等については、すでに『加賀前田家と北野天満宮』（二〇一九年、石川県立歴史博物館）がそなわり、加賀藩が北野天満宮に奉納した連歌については稿者も『近世武家社会と連歌』（二〇一九年、勉誠出版）で述べた。本稿では、菅公八百年祭のオりの万句連歌の資料「元禄十五年北野天満宮八百年御忌御手向万句」（小松天満宮蔵）を紹介させていただく。

れる「元禄十五年北野天満宮八百年御忌御手向万句」は、その万句の三つ物を書き留めたもので、後で述べるように、二巻分の三つ物が欠けるが、ほぼ全体を概観でき、どのような連衆であったかがわかる貴重な資料である。これまでに翻刻されたことはない。

昭和以降、菅公八百年祭のオりに加賀藩がかかわった万句連歌についての資料を、最初にとりあげたのは、侯爵前田家編輯部著『加賀藩史料』（一九三二年）と思われる。その元禄十四年十二月二十五日の条に以下のようにある。

十二月廿五日。前田知頼に明春北野天満宮八百年祭の代拝を命じ又万句の連歌を興行す。

〔政隣記〕

菅公八百年祭のオりに、加賀藩前田家は北野天満宮に万句連歌を奉納した。全巻が現存するのかわ不明である。ただし、小松天満宮に所蔵さ

十二月廿五日、来年二月天神宮八百年御忌に付、於洛陽北野神事修行。依之前田万之助知頼御代参被仰渡、名改修理、且一万灯可被上由被仰出。将又北野万句会始、俗号加賀万句。巻頭

梅か香や世々の松風神の庭

御願主

仰ぎても猶瑞籬の春

能順

空高き月は霞に頭はれて

風早中納言

鐘の声する峯静なり

西洞院宰相

舟とめし江の浪しらむ曙に

風早中將

塩干塩満折はしるしも

能東

誘はれて風の上に鳴衛

常久

夕景寒み霜や置らん

能斗

その後、おそらく『加賀藩史料』に拠って、大河寥寥は『加能俳諧史』(昭和十三年、金沢文化協会)に以下のよう記した(一三八頁)。

十二月廿五日前田知頼に明春北野天満天神八百年祭の代拝を命じ又万句の連歌を興行した。政隣記に「北野万句会始俗号加賀万句」

### 巻頭

梅か香や世々の松風神の庭

御願主

能順、風早中納言、西洞院宰相、風早中將、能東、常久、能斗

但し聯玉集に「聖廟八百年御忌ニ從綱紀公御手向の万句巻頭御作

代此神の守手向や梅のはな 同し時加州より手向の□句第一 梅

か香や世々の松風神の庭」

大河寥寥が「但し」としたのは、『加賀藩史料』が「北野万句会始、俗号加賀万句」の「巻頭」を「梅か香や世々の松風神の庭」とするが、それと脇句を詠じた能順の句集『聯玉集』の記述とが合わないことに疑問を持ったからであろう。『連歌大観 第三卷』(二〇一七年、古典ライブ

ラリー)の翻刻に従って、あらためて『聯玉集』の該当箇所とそれに続く一句を以下にあげる。

聖廟八百年御忌に從綱紀公御手向の万句巻頭御作代

五〇此神の守手向や梅のはな

同し時加州より手向の巻句第一に

五一梅か香や世々の松風神の庭

同し時一日千句第一

五二梅か香やあふけは天津春の風

右の記述から考えるに、五〇の句が万句連歌巻頭の発句、五一の句は代拝を命じた前田知頼に手向けとしてわたされた句で、知頼は、京都で、おそらく能順の手配のもと、公家らとそれを発句とする百韻を興行したということであろう。一巡に知頼の名がないのは、綱紀の「代拝」であるからか。

また五二の句の前書き「同し時」は、句意からして「聖廟八百年御忌」を意味していると考えられる。であるならば注目されるのが北野天満宮に所蔵される「八百年忌奉納連歌」である。原本未調査であるが、前掲『加賀前田家と北野天満宮』に写真が掲載され(一一五頁)、解説に

天神八〇〇年御忌の前年にあたる元禄十四年(一七〇二)十一月二十三日に天神に奉納された万句である。宮仕仲間によって奉納されたもので、「賦何木連歌」巻末に「行年七十五書之／預 能順」とあることから、この懐紙が能順によって書かれたものであることがわかる。

とある(二〇一頁)。掲載写真によれば

元禄十四年十一月廿三日

万句之内

賦何木連歌

明ほのは月と／花とのさかりかな 橋能順

(後略)

とあり、句上げはない。奉納連歌のため、一巡の後は名が記されない「二三付」にされたと考えられる。北野天満宮の宮仕によって、一日千句連歌が十回興行され、そのうちの一回が、先の五二の句を発句とするものであったと思われる。とすれば、能順は、加賀藩前田家奉納の万句と宮仕仲間奉納の万句にかかわっていたことになる。

なお、この他に小松天満宮にも千句が奉納された。「元禄十五年北野天満宮八百年御忌御手向万句」の巻末に巻一から第十までの発句が記されている。

## 二

「元禄十五年北野天満宮八百年御忌御手向万句」は、料紙は楮紙、横本、仮綴じ、仮表紙である。表紙に墨で打ち付け書きで

元禄十五年北野

天満宮八百年御忌御手向

万句「一」第三迄并二

小松御宮江御寄進之

千句発句共

とある。一丁目から先述のごとく三つ物が記されており、朱で通し番号が付されている。ただし、朱のちに記されたものと考えられ、しかも番号が間違っている(今回、朱の通し番号は翻刻せず、便宜上、洋数字で通し番号を付した)。

「元禄十五年北野天満宮八百年御忌御手向万句」には九八巻の三つ物が記されている。特別な奉納連歌であることからして、百韻九八巻分しか興行されなかった連歌を「万句」と称したとは考えがたい。二巻分が書き漏らされたと考えべきであろう。万句の発句は四季題でなされているので、季題に注目して全体をみると以下のようなになる。

春 1から30まで  
夏 31から49まで  
秋 50から78まで  
冬 79から98まで

こうした奉納連歌では、春と秋が、そして夏と冬が同数になるのが原則であるので、右のように春が三十巻であることから推して、春と秋が三十巻、夏と冬が二十巻であったのではないかと考えられる。とすれば夏と秋で一巻ずつ欠けていることになる。

また「御願主」(前田綱紀)が、春の最初の第一千句、夏の最初の第三十一千句の発句を詠じていることから、50番目の発句は秋の最初であったと考えられる。冬は98番目の発句を詠じているが、これが最後を

しめるからであろう。なお「御願主」の発句の脇句は能順がつとめており、これは「御願主」の発句が能順の代作であったことをうかがわせる。

### 三

加賀藩前田家が北野天満宮に奉納したと考えられる八五〇年御忌の万句の第一から十一巻分の発句を書き留めた文書が小松天満宮に所蔵される。それは以下のようにある。

権少僧都法眼順承写

御当官

八百五拾歳

御作代

万句春部 第一

松梅

松梅や神のかさしの世々の風

第二 前田土佐守殿

野を広み行袖分る若菜哉

第三 前田对馬守殿

朝附日唯うくひすの野山哉

第四 奥村丹後守殿

春雨の色は隠れぬ霞かな

第五 本多安房守殿

春の日の河音残す氷かな

第六 村井主膳殿

嘯るや八百五十年の鳥の声

第七 長九郎左衛門殿

うす色や又初雪の春の山

第八 横山求馬殿

下萌やこゝろを野への若緑

第九 奥村左京殿

月出て高根や四方の夕霞

第十 大音喜六郎殿

枝毎や露の故つく玉柳

二之卷

第一 前田大炊殿

庭広し春のあつまる花盛

(以下欠)

八百年御忌のおりが、主に北野天満宮関係者と京在住者によって発句が詠じられていたのに対し、八五〇年御忌では加賀藩の重臣たちの発句となっている。この違いは、加賀藩における連歌の位置づけの変化と考えられる。このことについては稿をあらためて論じたい。

### 【翻刻】

翻刻にあたり、原則原文のままとしたが、旧字を現行の文字にあらため

るなどした。虫損などにより難読の箇所は□もしくは「」で示した。

1 梅

此神の守る手向や梅の花

御願主

実を仰く春の言の葉

預法橋 能順

天地の色あら玉の年立て

松梅院 禪覚

2 霞

春の色空にそひ行霞哉

能侃

朝な〜に花を待比

常久

引うへし庭の山吹露置て

能什

3 鶯

うくひすの音に曙の扉哉

能観

梅の匂ひに霞行空

能養

風渡る水の青柳末懸て

常能

4 子日

高き松例に引る子日哉

乗喜

山をかたへに春める庭

能山

我宿と鶯の音や帰る覧

能作

5 若菜

摘まゝに心もうつる若な哉

常円

末野の春の気色立色

能恵

白露の日も夕霞雨見えて

能通

6 残雪

残り来て雪の深むる木陰哉

能養

うめの匂ひをふるゝ山道

能二

谷風の音は霞にうつもれて

能恵

7 柳

行かへり風の別れぬ柳哉

能泉

燕乱るゝ水の方〜

随忍

朝霞山もとめくる江に晴て

能盛

8 帰雁

春に雁さそ人やりの道の空

竹森檢校 任一

おほろ月夜の晨明の比

能二

うめかゝを枕に袖にかたしきて

能玉

9 雉子

草の色や雉子の妻の新枕

能知

かすめる名残をしむ朝露

能吟

山の端に春野の月の末見えて

能正

10 蝶

羽をかるみ空にもねなんこ蝶哉

能東

霞行野に吹風もなし

能也

春の日の入相の鐘や山ならん

能通

11 待花

花を待年〜長き行ゑ哉

御願主

をなし根さしの春の松か枝	能順	17夜花	
岩た、む春の池水寛ひかに	常久	暗き夜の光は花の匂ひ哉	随忍
12初花		春の有明待むかふ空	常祝
待得けりされはそ今朝の花曇	友也	浦浪に旅ねの雁や帰るらん	能林
名残閑けき春雨の空	能什	18散花	
月白き霞のうちに雁鳴て	常久	一木つ、ちらは散なん春の花	能通
13山花		入行ま、にすゑ霞む山	能玉
入そめて果なき花の山路哉	能也	雁帰る浪の浜川塩満て	随林
くれない枕からむ夏草	随林	19残花	
妻乞る床に雉子の声立て	能貨	花は今鳥の音深き山路哉	能佐
14小辺花		峯の霞も残る日の影	能利
影しつく水もかうはし花の色	常久	春の雪唯一村の色見えて	能養
岩ほに霞む月の白玉	随忍	20桜	
むら消に山路の雪の下たりて	能恵	桜花みつと思ひし春もなし	恵乗坊 快全
15朝花		霞る鐘にかへる山路	能順
夜の雨花に成にけり朝霞	能盛	雉子鳴野は朝またき立出て	常久
垣ねの露にぬる、鶯	能範	21苗代	
ぬる蝶の羽にたに風の見えやらて	随忍	苗代に重なる水の緑かな	御願主
16夕花		雨は柳かうへの白露	能順
かせ露に花の色添夕哉	能什	燕とふ羽風もや霞むらん	能作
小雨の名残薫る藤か枝	能貨	22遊糸	
軒端より霞に月の仄めきて	随林	いとゆふは霞の網の乱れ哉	常省

雲の白浪わたる春風

長閑なる沖の明仄月見えて

23雲雀

空高し声やつくりて夕雲雀

裾野の霞嶺の白雲

花にゆく心は道に先立て

24春月

明行か雲ゐに霞む夜はの月

むめの匂ひになれし手枕

旅ころもうら若草に片鋪て

25春雨

春の雨にいと、ひさしき夕かな

花の光もそはる白露

うす霞たな引ながら月見えて

26藤

半天に根やと、めけん藤葛

雨し降つ、霞む黄昏

春風や外山の雲に帰る覧

27山吹

匂へ袖うら山吹の花の露

胡蝶の行ゑさそはる、道

霞吹野への春風末見えて

京 七里彦左衛門

能範

28若草

能也

水煙り草は萌るや野沢哉

能育

朝の日影霞み来る空

能也

山懸る庭のうくひす鳴初て

能吟

29桃

能也

杯に酌るや桃花の色

権美

あかてあそへる園の春風

能二

うくひすも話らひ人に猶馴て

能松

30暮春

能慶

こゝろなき身にも名残や春の暮

常円

さくらか本に行とまる道

能知

蕨折つめる莖を袖にして

能満

31更衣

能業

夏衣春の心や下重ね

随信

はなは若葉の山の白雲

能業

杜鵑月の明仄色見えて

能信

32新樹

能満

深山木に花もなり行若は哉

常宝

ほと、きす待此頃の空

瑞順

いつかみん雨のさ月の影ならん

能二

33杜若

紫やねかよふ水のかきつはた

樋口永甫

正道

能源

能源

能探

能佐

常祝

能探

常祝

瑞順

政治

常祝

能佐

常祝

常円

能佐

御願主

能佐

能順

常円

能順

常円

能山

能順

猶章

能順

能洞

能洞

能隆

能隆

松梅様内右□

枝も茂れる池の藤波

岩高き瀧の白糸乱れ来て

34 牡丹

香は残れよしや花杜廿日草

露になれ来し夏の有明

待空も良秋風の気色にて

35 待郭公

待ほとはいかに遠山ほと、きす

行ゑ詠る夏の晨明

木毎花若葉の色にうつろひて

36 朝反魂

待明し今朝や一声子規

窓橘のにはふ手枕

玉簾涼しき風に月出て

37 夕不如帰

時鳥雲に残れる夕哉

峯の五月雨晴初る空

みとりそふ梢つゝきに風過て

38 山杜宇

待くらす山路よ幾重ほと、きす

若葉かうへの月になる空

桜花名残や露に匂ふ覧

能知

常能

能泰

能声

能什

能佐

梅禅

能範

常円

能盛

猶章

能作

能声

能玉

能什

能貨

39 夜鵲

深き夜やいかに忍音時鳥

晨明になる夏山の月

木隠にともしの影や残るらん

40 菖蒲

長き根や水より軒の菖蒲草

蛩も露も同じ玉たれ

月は猶またるゝ宵の雨見えて

41 若竹

吹風も和らく竹の若葉哉

朝置窓の露の涼しさ

晴初る雨夜の蛩影濡て

42 五月雨

五月雨は水上しりぬ早瀬哉

柳杳かに茂る川つら

山本の道は田中の末かけて

43 橘

袖ふれは名に橘の匂ひ哉

山ほと、きす忍ひ音の暮

立迷ふ雲るに月や舍る覧

44 常夏

なてしこに浅茅色付河辺哉

京 大森氏 好治

常能

能恵

御願主

能順

能観

瑞順

瑞種

能二

随柳

随忍

随林

随柳

随忍

随林

随柳

随忍

随林

随柳

随忍

随林

涼しき頃の白露の道

更る夜の月より秋や通ふ覧

45水鶏

木隠れて秋夜深き水鶏哉

谷に音する夏の山水

五月雨は余波も峯の雲凝て

46夕立

夕立や山松の露垣ね水

風は茂りにわたる葛のは

初秋のまた仄なる虫鳴て

47納涼

夕涼み色社見えね松の声

漸はた秋を催せる山

稲妻の遠の白雲仄めきて

48御稜

と、まるや夏の形代早せ川

くりし井関の浪の涼しさ

むら柳散あへぬ風に月見えて

49夏月

涼しさやみれはそ明る夏の月

しけり風吹窓の村竹

白露の外面の早苗遙にて

能喜

50立秋

常円

はつ秋は心の空の夕かな

随秀

吹やす、しき萩の上風

能程

転寝の枕驚く月出て

猶章

むしの音に乱る、野への千草哉

常松

光そひ行月の白露

瑞哲

秋風は小夜の時雨の空晴て

常能

52一葉

能貞

はしたなし一葉に四方の秋の風

能探

垣ねにむすふけさの白露

能二

有明の月の朝霧立初て

能探

53露

野への露は色く玉の光哉

能梅

くる、空より月になる影

瑞順

峰越る袖の秋風吹初て

能貨

54霧

山毎に入ぬる磯や霧の海

朝け鎮まる秋の松風

俊永

散しける木葉の色に月すみて

能利

55萩

風露のいろくになる小萩哉

能恵

御願主

能順

常円

能吟

能二

能恵

能源

能梅

能吟

政俊

能盛

能恵

能辰

能利

能暦

常世

大坂 小西彦左衛門

京 三宅太郎左衛門

かきねの月の更て行影

山水の夜寒の流音立て

56 薄

白露の色をますほの薄哉

萩の初花咲出る頃

夕月夜いつ有明の影ならむ

57 蝸

ひくらしに照日涼しき木陰哉

山路の空の秋の初風

旅ころも朝気の露に起出て

58 朝顔

薺の花のしつらふ籬哉

影いさよへる月の朝霧

水遠き野沢の鳴の羽音して

59 三か月

三か月は千々の夜籠光哉

通ふ木間の秋風の空

白露の門田の稲は色めきて

60 待月

待月のかせの色めく雲間かな

す、しくなれるいな妻の影

木隠の秋の山水声添て

京 三宅庄兵衛

能曆

能声

能松

重直

能松

随忍

常裕

能喜

能覚

随供

随柳

能山

御願主

能順

能作

能林

能辰

能玉

61 朝月

雲風に光や残る今朝の月

梢の秋の落葉せし山

岩かねの白露ましり霜降て

62 夕月

夕風を木間の月の光かな

江の水澄る秋の山本

空高き白雲寒み雁鳴て

63 山月

行月の心にかゝる端山かな

むら雲うかふ秋かせの空

紅葉、に梢の時雨跡見えて

64 水辺月

月やとり水草清き流哉

深山の秋の松かせの声

時雨降嶺の夕霧立籠て

65 野月

野は露の数有月の光かな

山のやとりの草の村く

梢より松の秋かせくれ初て

66 梢月

月出て秋の色添梢かな

能貨

随恵

常能

瑞禪

常能

能源

能源

能曆

能源

能吟

随松

能範

能範

能見

清松院

禪哲

友世

瑞禪

能恵

能恵

能恵

嵐にしつむ嶺の夕霧

能探

72 鳴

水寒き入江の末の雁鳴て

能什

空に水うつらふ鳴の羽音哉

能春

67 雨後月

雨雲の月は片よる光かな

常能

刈田の月の暁のかけ

能利

初雁かねの秋風の空

能恵

73 持衣

能洞

夕ぐれの門田の稲葉色付て

能喜

持そめし露は霜夜の砧哉

能洞

68 晨明

在明に治まる秋の光哉

常能

雁かね寒き有明の空

常能

菊の匂ひにむすふ白露

随林

74 鶉

随忍

松風の薄霧寒く棚引て

瑞探

木葉散嶺の秋風吹立て

能徳

69 雁

初雁の心高しや雲のうへ

能順

うつらなき白露寒き夕哉

能徳

澄行月の秋風の頃

常円

薄打ちる野への山風

能俣

落葉「虫損」森の白露さ夜更て

能作

月落る入江の秋の水澄て

能林

70 鹿

明る夜の鹿の声する野風哉

能利

75 菊

永甫

いさよふ月も花の萩原

常久

籬の秋の霜ふれる頃

能山

方よれる霧の下露みえ行て

能観

有明の月幽なるむし鳴て

能泉

71 稲葉

八束穂に君か代を知稲葉哉

昨夢

山姫のおもふ一木か初紅葉

宣賢

松に治る里の秋風

能養

77 鴟

有共

有明の光は峯の雲引て

常円

空遠き月の薄霧棚引て

能喜

越中魚津 細井氏

京 喜多藤右衛門

新章

裾野の山の薄霧の月

秋風の一むら時雨跡見えて

78 暮秋

行秋の猶休らへる夕かな

尾花かうへの寒き白露

野分立籬の月の仄めきて

79 時雨

冬来ぬといふ斗なる時雨哉

むら雲寒く嵐吹(脱字あるか)

月残る端山の秋沙誘はれて

80 霜

朝風の行跡白し野への露

薄むらく枯渡る陰

落残る刈田の水の月澄て

81 枯野

名残なき草にも枯ぬ野風哉

小松かうへの霜に成頃

山里の道の岩橋奥見えて

82 落葉

更る夜の音重れる落は哉

嶺の嵐の寒き山里

朝ほらけ月の光に雪晴て

京 村上氏

常祐

随源

閑長

瑞源

能二

能順

快全

能喜

能侷

能梅

能洞

能周

能柳

能林

能顯

常喜

83 網代

波風の床にうきねの網代哉

霜を払ふか千鳥なく声

村く川原の浅茅枯立て

84 風

木からしや色かはり行峯の松

朝の月の影寒き空

水氷る入江を遠み雁鳴て

85 水鳥

川淀にそふる水鳥の青羽哉

かたへ氷れる岩の白浪

松寒き嵐の木陰暮初て

86 霰

道芝に氷る水く霰哉

枯て夕日に薄立かけ

人見えぬ山田の嵐音さえて

87 丸雪

笹の葉の太山にふれる霰哉

夕日に寒き松風の音

鴉なく水のしら雲末晴て

88 千鳥

浜ちとり跡や乱る、藻塩草

瑞俊

常恵

能業

能音

能慶

能春

随源

随柳

常久

能門

能周

能喜

随門

能業

常程

乘敬

明離れたる霜の真砂地

山風月吹をくる跡見えて

89 神楽

神かくら仰け明ゆく天津空

霜もさやけき竹の葉の月

水白く荒田や汀氷る覧

90 埋火

うつみ火にいとま寒けき朝戸哉

聞し嵐の雪白き庭

冬の日を時雨木葉に過し来て

91 寒梅

霜置てかたへ梅咲冬野哉

竹の葉寒く月残る里

秋更る荒田の水の音澄て

92 寒月

月高く梢にさゆる嵐哉

鴛のなくねも氷る山水

雲深き谷の下道末暮て

93 氷

早き瀬も風のしからむ氷哉

夜深き千鳥鳴渡る声

霜ふれる茅はらかうへの月寒て

能利

94 待雪

能範

落葉して待る、雪の梢哉

能東

しくれの、ちの嵐吹山

能也

有明の月澄渡り雁鳴て

能養

95 初雪

能盛

けさ雪に開き初たる朝戸哉

常久

時雨くし庭の松かせ

能範

音寒き夜の落はに目もあはて

能盛

96 野雪

常祝

うす雪の裾野や行手嶺嵐

常能

松はら寒き明ほの、空

随忍

波白き浦の漁火幽にて

常能

97 山雪

今詠め継や春秋雪の山

松みとりなる木くしの冬枯

了長

行雲や朝の嵐残るらむ

能佐

98 松雪

梅禪

いや高く仰くや幾世雪の松

能業

春風ちかく梅匂ふ里

能声

うつみ火の残る夜床に月見えて

能玉

元録十五年八百年御忌従

日蓮宗出家

日祥

能育

能什

随珍

随忍

能佐

有吉

能佐

能利

能盛

能順

能声

御願主

能順

能東

能順

能順

能東

御上御手向之千句発句

梅 第一

御作代

仰せ世にうめか、深き神慮

子日 第二

引袖もひかれん松の千とせ哉

苗代 第三

苗代に栄へ見えけり民の門

柳 第四

吹風も豊になひく柳哉

若草 第五

若草に契も深し野への露

山吹 第六

山吹の水を色とる岸根哉

藤 第七

たくひ又あらしにかゝる松の藤

堇 第八

行袖やとむる春野のつほ堇

桃 第九

みるめにもゑめる色有桃花

桜 第十

咲つゝく陰や常盤の家桜

追加

一木より枝さす花の林哉

貞親

〔付記〕本稿をなすにあたり、貴重な資料を閲覧調査させていただき、翻刻の御許可をたまわりました小松天満宮北畠能房氏に、末尾ながら厚く御礼申し上げます。

本研究は科研費（20K00311）の助成を受けたものです。

政長

有輝

親長

惠輝

孝行

英盛

直堅

政敏

尚運